

鮎川信夫

全集

Ⅷ

鮎川信夫吉本園
全対談

鮎川信夫全集

VIII

鮎川信夫、吉本隆明
全対談

監修

三好豊郎
吉本隆明 思潮社
大岡信

鮎川信夫全集 第八卷 鮎川信夫、吉本隆明全対談

著 者 鮎川信夫ほか

発行者 小田久郎

発行所 株式会社思潮社

〒二六二 東京都新宿区市谷砂土原町三―十五

振替東京八―八一二 電話二六七―八一五三・八一四一

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 岩佐製本所

製函所 美濃羽製函所

発行日 一九八九年十一月一日

鮎川信夫全集

第八卷

鮎川信夫、吉本隆明全対談

目次

文学の戦後

文学の戦後

11

第一次戦後派と反体制運動 時代の暗さと感性 壇谷雄高の軌道修正
大岡昇平「俘虜記」と降伏の観念 江藤淳「もう一つの戦後史」について 戦前・戦後の自由の問題
「荒地」の詩人たちの変遷 「敗戦」と国家と個人 野間宏「真空地帯」と靖国神社
戦争犯罪と東京裁判 アジア的ロジックと天皇制 無頼派と「近代文学」の人たち
ソルジェニツィンの「収容所群島」 スターリン体制の必然性 現代文学の変質
島尾敏雄「死の棘」と吉行淳之介「夕暮まで」 カウンター・カルチャーの時代 現代的小説
文芸批評の大衆化 現代文学の行方をめぐって ヒューマニズムの終焉と「近代の超克」
「試行」の二〇年 六〇年安保の本質を見る 第三の新人のこと

詩の読解

1 存在への遡行——思想と文学 90

「書物の解体学」の位相 アメリカにおける社会の変質と転位 美醜の問題
欠落とその心的現象 運・不運の思想 自然の彷徨としての欠落
思想的態度の大前提・自存と発語

2 情況への遡行——身体論の根柢 107

絶対的正義の終焉 遊びの「場」 平等・不平等の観念——身体論の異相
詩人の才能 舞踊の体験 女性・その不可解な意匠

女流詩人の場合 ウーマン・リブ 差別の歴史的構造

3 戦後詩の危機——石原吉郎の死 131

共同性にたいする考察と防備について 日本的美意識への傾斜 歴史意識について
詩の出発と到達 晩年とその予兆 収容所体験と戦後
若い詩人たちについて 詩の風俗と大衆化現象について 詩の技術について
受験生詩人たち

4 戦後詩を読む——戦後詩の読解 152

はじめに 三好豊二郎「囚人」われらの五月の夜の歌 田村隆一「十月の詩」
中桐雅夫「人民のひとり」黒田三郎「賭け」北村太郎「地の人」
長谷川龍生「理髪店にて」関根弘「女の自尊心にこうして勝つ」黒田喜夫「空想のゲリラ」
谷川雁「商人」革命 清岡卓行「子守唄のための太鼓」吉岡実「僧侶」
飯島耕一「他人の空」岩田宏「感情的な唄」吉野弘「I was born」
鈴木志郎康「終電車の風景」石原吉郎「足利」吉本隆明「小虫譜」
鮎川信夫「繋船ホテルの朝の歌」

5 戦後の歴史と文学者——いかに死と対峙するか 189

コミットする契機 「サルトルは全部間違っていた」組織というものの在り様
危機意識と楽天性 全般的な末期症状 状況の怖さ
インテリの諸相 改憲論について 天皇条項をめぐる
知識人と天皇制の問題

思想と幻想

1 意志と自然——思想のオリジンへ

240

のつべらぼうでない構造 論理がひとりて歩く 漱石の孤独、文学の概念
内閉的な精神状態 論理的には全部「敵」 安保のとき醒めていたこと
ユダヤ的思想家 意志的であること 文学の現場、思想の源流
考えたことの価値 重要文化財か千円以下か 死から逆に「いま」を考える
俗っぽさをゆるがせにしない 禅にはプロセスがない 生理が思想に勝つ
死、復活、自然 「面面の計らい」 自然への意志的な過程
共同性が窮極で無になる

2 家族とは何か——性と国家血縁

270

老人問題・老いたること・家族 家族は本来的に公と対立する 近親姦禁忌と家族の閉じていく本質
親族との関係について 女の男に対する憎悪 性・婚姻の関係は多元化するか
男女の現在のな、そして本質的なギャップ 国家について 島尾敏雄「病妻もの」をめぐって
家族の無世界性 血縁・親族の意識について

3 「欺異抄」の現在性——思想の逆説

295

悪人正機説をめぐって 思想の逆説 個人の倫理と集団の倫理
僧侶集団の生活 親鸞の現代性 親鸞とキリスト教
死と救済 親鸞とマルクス主義 親鸞と日蓮
真宗の論理 親鸞と善鸞 不可避性について
思想の運命 誤解と曲解 全体的思想
危機の本質 ヒューマニズムについて スターリニズムについて
ソルジェニーツィン問題

4 思想の進化と幻想——ヘーゲルとマルクス

326

「反体制のシンボル」という前提条件 「近代的我自我」の確立と擁護 「職業革命家」の登場へ
「同類のなかの異類」の対立関係 「思考実験」と「異常」と「正常」 「進歩」という名の信仰
信仰と真理の内と外 「イエスの方舟」事件の思想性 コミュニオンを支える吸引力
「家族」の価値観と断絶 共同体に必要な平等の原理 ヘーゲルからマルクスへの流れ
マルクスの根本モチーフ マルクスの考え方の失敗した実現

5 まとめ——思想の生理と原理

359

体系的思想を吸収して独自の思想を打出す 思想のブレをシステムティックに詰める
その時々状況に生きていなければ絶対ブレる
確認のための解註

365

全否定の原理と倫理

詩人の戦争責任と意識——戦後を読む

380

言っておきたいこと 詩人の戦争責任 現代詩人会の姿勢
詩人の文化政策 戦後の出発

崩壊の検証——反核をめぐる戦後理念の終焉

402

西脇順三郎の死とその詩的宇宙 西洋との対し方から見た西脇順三郎 何ものかに追いつめられた現代の状況
反核運動の論理と退行性・欺瞞性 根源的な世界認識の欠如 「核」の神話をどう解体するか
左・右、正統・異端のシンボルの転換点としての現在

詩のラディカリズムの（現在）——現代詩のラディカリズムの転換を問う 423

詩を書き続けていく理由とは（若い現代詩の射程距離 反・歴史としての詩）
（現在）による自己解体の表現 いま、言葉の力はどこにあるか

全否定の原理と倫理——壇谷論争の意味するもの 438

論争の根底としての反核運動 左翼性と倫理 集団の理念と文学の理念

戦後過程とアメリカ 三浦事件をどうとらえるか 状況と原理の位相

文学者の生涯と思想的課題

確認のための解註 469

付・自我と思想

桶谷秀昭 生活喪失と思想喪失 472

かの時にはかの生き方があり…… フランス風ブルジョワはかなわないな 無私の情熱に貫かれた西洋かぶれ
もはや「理想的な生活」などはない 最低限自分だけは救ってみせる思想の力 相対感覚という安全装置

反思想と日常の生活間との隙間

磯田光一 戦後思想の現在 490

マッカーサー、吉田茂と戦後思想 一九四〇年代論の欠落と八・一五転向

六十年安保と戦後思想の転回——吉本隆明・竹内好 心情的ナショナリズムの露出と増幅 韓国問題と現代版征韓論の風潮
日本人のメンタリティーと戦後思想のディレンマ——近代と反近代のあいだ 大衆について——「大衆の原像」と大衆論の陥穽
思想の共同性・現実運動の党派性 情況の不吉なマヌーバー化 左翼思想内部に膨脹するナショナリズム

戦後思想の破産、個の思想軸の自立を

鶴見俊輔 戦争について

514

徴兵検査まで 戦争と反戦は等価か 暴力の構造

仲間について ナショナルとマルチナショナル 二つの反戦論理

大正時代から戦後民主主義まで イロニーとユーモア 自我の破壊 絶対的な正義 五分五分の論理と七三の論理
天皇の陰謀と鬱ぎの虫 不従順のすすめ 吉本隆明について

秋山駿 精神の確立と戦争

535

人生の変わり目 戦中世代のわからなさ 精神原理の確立

日本とは何であったか 日本語の経験 敗戦後の社会

戦前と戦後の社会 生き方のスタイル 現実社会との距離

人生における損と得 加害者としての世代 孤立した言説

月村敏行 〈対幻想〉と〈共同幻想〉

559

戦後における「荒地」の効用 〈対幻想〉の問題性 〈共同幻想〉の枠組がしっかりしていれば……。

日本の〈共同幻想〉の特質について いちがいに「豹変」とは言えない 第二次「荒地」の創世

思想に対する不信感がある 〈自然の問題と「乙な位置」 詩人と批評について

〈事件の詩〉と〈日常の詩〉について 『一人のオフィス』について 老齢の問題と〈対幻想〉

橋川文三 体験・思想・ナショナリズム

579

戦争期の二年間の違いについて マチネ・ボエティクの人びと 思想と現実とのすきま

鮎川信夫氏とエリオット体験——ホール・ライフとは何か 歳時記 鎖国について

橋川文三氏と日本浪漫派体験 小林秀雄と保田與重郎 時代の閉鎖——ダンスホールの閉鎖ほか

軍隊体験について 天皇および天皇制について 戦後ナショナリズムの帰趨——経済ナショナリズムについて

文化ナショナリズムとニヒリズム 思想の力 ナショナリズムのコンピュータ処理

両刃の剣としてのナショナリズム

内村剛三 拡散する閉塞状況 606

極限状況を方法的につかまえる 「荒地」と「果実のない土地」 苦しんでいないから詩も書けない
原爆有効説の上の安泰 ロシア・マルクシスト・無所有の論理 無節操こそが日本の節操
ヤクザ的心性・飯が食えないということ 石原吉郎の詩の拡散と崩壊 ロシア語の呪縛と影響
孤立者の防禦の姿勢 言葉は伝わるもの

北川透 思想的な肉眼の成熟 624

黒田三郎の異質性 詩人と力 「市民生活」からの眼 「荒地」の転回
詩の土台としての「文明観」 詩の存在理由 一貫する思想的モチーフ
「戦中派」はあるのか 現在が引き受ける問題 難解詩とは

〈位置〉と〈姿勢〉 648

解説

現代思想の「水準原点」 杉本春生 656

掲載誌紙一観 669

文学の戦後

文学の戦後

第一次戦後派と反体制運動

編集者 本日は、お忙しいところをありがとうございます。

お二人とも戦中から詩を書かれて、敗戦のときには、大人としての意識を持ってある物を見るという年代に達しておられたのだと思います。そして、鮎川さんは、戦後は詩誌「荒地」に拠って戦後詩の一翼を代表する形で現在までやってこられました。吉本さんも、詩作のかたわら旺盛な評論活動でかつてない批評のジャンルを切り拓いてくれました。そういう意味では、お二人とも身を以て戦後の文学史を体験してきたわけであります。そこで、ついこの間も本多秋五さんと、江藤淳さんの間などで、日本は無条件降伏であったかどうかというような論争がございましたけれども、戦中、戦後をどう認識するかということ、戦後文学全体、戦後の歴史にもかかわるようなことになってくると思いますので、その辺のところからひとつお話し願えればと思います。

吉本 ヨーロッパでいうと、スペイン戦争を契機にして、スターリンのマルクス主義に絶望していったスベンダーとか、オーデンとかいう詩人たちがいますね。どうだったんでしょうか。鮎川さんたちが同時代的に詩を書き始めたときには受け入れていたわけですか。

鮎川 スペイン戦争のときは、そういうマルクス主義への絶望というものは、オーデンなんかにはまだなかった。ですから、最初は人民戦線側についたわけですよ。そのころ、イギリスの知識人、文学者はやっぱり二つに割れたわけけれども、人民戦線派が圧倒的に強かった。フランコ側についたという人は、有名な人ではロイ・キャンベルとか本当に一、二しかないですね。だから、そのころはまだそういう左翼に対する絶望というもの一般的にはなかったと思うのです。

ばくらが詩を書き出したときは、その渦中から書き出したわけじゃなくて、それがあつた程度終わっちゃってからでしょう。だから、そういうことをある程度勉強したわけですよ。けれども、ゼネレーションからいうと、オーデンやスベンダー、ルイスなどは二〇年代に活躍したパウンド、エリオット、あるいはジョイス、そういうゼネレーションの後のわけですね。それで、やっぱりそっちの方に親近感を持ったですね、感じとしては。そういうことがあつて、オーデンの影響の方が、詩についての考え方は別として、現実的な関心の上では強かったと思うのですよ。

吉本 ばくは知識が乏しくてわからないのですが、そうしますと、オーデンとかスベンダーのような詩人たちにとってスペイン戦争は反フランコで異和はなかったですね。

鮎川 とにかく反ファシズムという傾向が非常に強かった。

吉本 反ファシズムということは、第二次大戦までの主要な立場ということになりますか。

鮎川 第二次大戦まではそうだったでしょうね。だから、ほとんどの大勢というのはとにかく反ファシズムということで一致していて、自由主義的な立場の人も、みんな左翼とほとんど同じ行動をとった。反ファシズム、反ナチズムということではかなり一致していたと思うのです。もちろん中には、イギリスの作家でいえば、ウインダム・ルイスとか、何人かナチズムにも共感したような文学者もいます。いることはいるけれども、大勢はやっぱり人民戦線派が強かったと思うのです。

吉本 そのこと自体は、鮎川さんたちはもう戦前に知識として、あるいは感性としてはよく知っていたわけですね。

鮎川 それは知っていました。だから、ぼくら現在でもそっちの方に同情がありますね。

ただ、おかしなもので、きょうは戦後文学を扱うんだけど、戦後も三〇年以上たつちゃうと、その時点で思ったことといま考えることと、ちょっとずれてくるでしょう。ぼくは、どんな人でもそうだと思う、そういう観点から見るとずいぶん違ってきちゃうんですよ。だから、たとえば人民戦線派に対して、当時のほとんどの文学者、知識人が共感を示して、いわば参加するような形で文学活動をした、そういうことが全面的に正しいかどうかということは、別の歴史の目で見なければならぬ。

考えてみると、それは、いまから見れば一〇年ぐらい前です

が、ロバート・グレイブスという詩人がたしかいったんと思うけれども、フランコがいたんで、連合軍は第二次大戦に勝利を収めることができたんじゃないか、ということがあるんです。もしスペインがフランコの統治でなかったら、非常に困ったことになったんじゃないかという考え方があるわけです。

というのは、フランコだったんで、ヒトラーもムッソリーニもあそこを手をつけれなかった。もしあれが人民戦線派の政府なんかできていたら、第二次大戦でベッチャンコにつぶされていたかもしれない。そうなる全然わからないですね。

吉本 スペイン戦争というのは、ぼくの印象では、よく記憶を整理したことないですけれども、小学校の何年かのときで、そのとき小学校何年かの日本の子供にとっては、フランコの方が正しい、少なくとも日本の報道とか世論みたいのだと、絶対そうなっていましたね。

鮎川 それはそうだ、赤と戦っているんだから。

吉本 それは無条件的にそうなっていました。それからずっといって、ノモンハン事件とか、日中事変とか、だんだん戦争くさくなってきましたね。そういうものの正邪については全部、どういったらいんでしょう、軌道は子供のときから敷かれたみたいなのがあります。その感性というのが、ぼくは鮎川さんと年齢が多少違って、それだけでどのくらいの意識の落差があるのかということがよくはかれないところがあります。

もう一つは、日本の文学では、戦後派といいますが、もっとはつきりいって第一次戦後派の作家たちと、「荒地」の詩人たちは共通の年代で、共通の感性と、共通の体験みたいなものが

あるというふうにされているのですね。

そこところでよくわからなかったのは、左翼といいますか、その当時の共産党でもいいんですけれども、そういうものに對する体験の仕方が違うんじゃないかとおもうのですが。

鮎川 それが一番違うところじゃないでしょうか。

吉本 そのことについては、鮎川さんたちはイギリスとかアメリカの左翼問題の体験の迫体験ということになりましようか。

鮎川 結局そうですね。

吉本 日本の場合には、大体プロレタリア文学運動とか、日本共産党の運動の中にいたり、外郭にいたという人が、第一次戦後派の中核を形づくっていましたね。「荒地」の場合には、日本のその問題はあまりありませんでしたか。

鮎川 ないですね。というのは、つまり、共産党体験というのがないんですね。

吉本 その周辺の体験もないわけですね。

鮎川 ただ、強いていえばファシズムとかナチズムは好かぬ、それだけです。つまり、「近代文学」の人たちの場合とぼくらが一番違うのは、そこだと思ふのです。「近代文学」の人たちは、とにかくマルクス主義をある程度信じていた。共産党体験もあったと思う。少なくとも友達があつたとか、それぞれの度合いであつたんで、おそらく、同じスペイン戦争にしても、関心の度合いはずいぶん違うと思うのです。自分たちがどうしてもやらなければならぬと思うのと、何となくファシシヨの方は好かぬと思つているだけなとは、全然違う。

今度、ずっと「戦後文学史」に関する資料をある程度読み返

してみたわけだけれど、本多秋五の本にしても平野謙の本にしても、それは別に大きな違和感じゃないけれども、やっぱりぼくらがいつもひっかかるのは、マルクス主義に對するシンパシ―が全然違うということです。ぼくらは、マルクス主義そのものにはシンパシ―が全然ないのです。戦争直後から現在に至るまで、日本の情勢は相当変わっているけれども、いわゆる第一次戦後派というのは、根本的には、依然としてマルクス主義へのシンパシ―を失っていないわけですよ。

吉本 そう思います。

鮎川 最近まで失っていない。だから平野さんなんか晩年に執念を燃やして、たとえばスパイ事件なんかをしつこく追求したでしょう。ああいうのは、ぼくらからいうと、どっちだっていいじゃないかという問題なんです(笑)。けれども、ああいうところに執念を持っているというのは、若いときに党の活動というものに疑問を持っているというのとは、若いときに主義とかイデオロギーとしては賛成でも、何か実際の行動面で抱いた疑問というようなものが晩年に至るまで持続して、何とかそれを解き明かしてやろうというのが出てくるわけでしょう。

吉本 そうだと思えますね。

鮎川 けれども、ぼくらにはそうした関心はないですね。ぼくらよりも一、二年先の人は、ぼくは早稲田の第一学院だったんですけれども、文芸部なんか見ると、上の人にはいるわけですね。戦後たとえば共産党から立候補した弓削徳介なんかもいたわけですよ。そういう連中が共産党の何かだということはみんな知っていた。けれども、一、二年の差だけれど、何かぼくら